

小林勇文集

第十卷

筑摩書房

小林勇文集 第十卷	一九八三年七月二十日	第一刷発行	著者 小林 勇	発行者 布川角左衛門	発行所 筑摩書房	101東京都千代田区神田小川町二ノ八	電話 ○三(二九一)七六五一営業部 ○三(二九四)六七一一編集部	振替 東京六、四一二三	印刷所 精興社 製本所 鈴木製本
-----------	------------	-------	---------	------------	----------	--------------------	-------------------------------------	-------------	------------------

乱丁・落丁の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

夕焼

*

故人今人・酒のみばなし

熊の出る市

生まれた家

長つづき

音

夕空

靖節先生を恋う

1

169

180

182

186

189

193

194

若者について	197
神田っ子岩波茂雄	198
春 暁	201
水のある景色・石狩河口	202
独 居	205
秋彼岸	208
銀杏の葉	211
南アルプス林道に思う	212
山 道	216
ものをすくなく	218
還 暦	221
ステッキ	223

朝の雨	224
霧の朝	226
秋	227
遺言	228
漁師源兵衛	231
さんごく	234
口笛	236
子守唄	238
駕籠で嫁入	240
酒のむ人々	244
裸でビールを	260
雑談	263

茂吉の故郷の食物

長い夕飯

酒飲み半世紀

*

茶の間

石筆
1

石筆
2

憂楽帳

視点

週言

日記から

407

371

357

344

309

295

283

273

269

266

詳細目次

解題

口絵・果実鉢

一九八〇年作

詳細目次

夕焼

一年

一年

年が変って

梅雨近く

断片松方三郎

夕焼その他

通信簿

就職の季節

信濃の水

「信濃の国」が泣いている

山を見海を見

鎌倉絶望と希望

鎌倉繁盛記

117 112 108 105 102 99 96 96 85 82 64 3 3

静かなる酒

身辺の美

或る日

帰郷の旅

鮭

投網仲間

大家族

孫

はなれ

肖像

私のコレクション

日暮れの感想

人間書画一如

素人

私と小説

秋の声

夕焼

163 161 158 155 153 151 148 143 141 138 136 133 129 127 124 121 119

故人今人・酒のみばなし
 熊の出る市
 生まれた家
 長つづき
 音
 夕空
 靖節先生を恋う
 若者について
 神田っ子岩波茂雄
 春暁
 水のある景色・石狩河口
 独居
 秋彼岸
 銀杏の葉
 南アルプス林道に思う
 山道

216 212 211 208 205 202 201 198 197 194 193 189 186 182 180 169

ものをすくなく
 還暦
 ステッキ
 朝の雨
 霧の朝
 秋
 遺言
 漁師源兵衛
 さんごく
 口笛
 子守唄
 駕籠で嫁入
 酒のむ人々
 裸でビールを
 雑談
 茂吉の故郷の食物
 長い夕飯

269 266 263 260 244 240 238 236 234 231 228 227 226 224 223 221 218

酒飲み半世紀

273

茶の間

283

ボタン

283

デッキュー

284

夜半の雨

285

失敗談

287

リュウマチ

288

似たもの

289

鳥の巣

291

職人

292

実朝の歌一つ

293

リス

294

石筆 1

295

ありあまる食糧

295

標語

296

贈賄未遂

297

お隣り

298

桜島大根

299

研究費

300

本の世界

301

雨

302

二十五年前

303

立腹

304

ナワ飛び

305

生まれた日

306

石筆

307

石筆 2

309

老人の国

309

火事の季節

310

科学知識

312

葬式の花

313

標語の効用

314

陶片

316

昔の母
 徴兵
 酒
 流出
 北洋漁業
 チベット
 地震予知
 美しい川
 桜
 山菜
 本を読む人
 自然の中へ
 家族
 雨
 ミツパチ
 病院にて
 中山道

338 337 336 334 333 332 330 329 328 326 325 324 322 321 320 318 317

さくらんぼ
 記録映画
 夜明けの国
 憂楽帳
 土曜日の会話
 声明と演説
 お堀端にて
 他人のゴボウ
 映画の見方
 自然の反撃
 雨・干物・飯・子供
 神主繁盛
 音の休日
 荷風の遺産
 展覧会場で
 国鉄無神経
 名刺を眺めて

356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 344 342 341 340

視点

追悼会にて

新しい機械

住宅と墓

海岸にて

花の下

ひき逃げ

全力という言葉

政治家のいばり

広告

美しき日本

無題

ラッセル者

不安について

週言

音の暴力

山を移す

非常袋

無法地帯にて

郵便物の遅配に思う

写真機持つ人たち

三里塚に思う

こどもニュース

硝子の浜——先生に訴う——

住民に味方せよ

赤い提灯

高原にて

故郷を見て

がけくずれ

中途半端

日記から

千曲川のアー

林の中で

飛行機の騒音

357

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

407

408

409

八月十五日の断片

買い物

ユウスゲ

浅間山麓

虹

母と子

蜂

寅彦追想

寅彦追想

(一)

(一)

夕

焼

一年

一年

○

一年

一九七三年。今年も七月半ばに北軽井沢へ来た。去年までは勤めがあったので、ああようやく来たというような感慨があった。今年は全く何の束縛もない故であろうか、そういう感想もわかなかった。それは一つには、此処での独り暮らしにも慣れた故もあるだろう。毎年自動車にいろいろのものを積んでやって来た。今年も車にしようかと、少し迷ったけれど、途中の混雑と時間のかかるのが嫌で、結局小さな鞆とステッキだけを持って、電車にした。この山小屋を建ててから、もう六年たつので、くらしの道具は一通り備わっている。悠ばっていろいろの本を持って来ても大して読書したためしがない。今年は去年置いて帰ったもので、多分いいだろうと思った。

勤めがなくなつて、一日中、一年中自分の自由になる。愉快でもあるし、勝手な勉強の出来るのは